

六ヶ所村とこの映画製作への思い

島田 恵 映画監督・フォトジャーナリスト

今、ご覧いただきました映画の監督で島田恵と申します。私からは映画と主に六ヶ所村のことについて話をさせていただきます。

本当に悲しいことに、福島原発事故が起きました。ここにきて原発のことやさまざまな原子力施設について気づくとか学んだ方も多と思います。

今から27～8年前の1986年4月、チェルノブイリの原発事故（当時ソ連、現在ウクライナ共和国）がありました。ご記憶にある方もいらっしゃるかと思います。私は当時まだうら若き20代の半ばでして（歳がばれましたけど）、それまでは私自身も原発のこととか、ましてや青森県六ヶ所村の核燃料サイクル施設建設予定（核燃）¹⁾のこともちっとも知らずに生きてきました。けれども、地球規模で放射能汚染を起こしましたチェルノブイリの事故のあとに、原子力というのは、こういう危険性があるんだということに気がついたんです。ちょうどその年に青森県の下北半島に行く機会がありました。それから私は六ヶ所村と長く関わってまいりました。



プロフィール——島田 恵（しまだ けい）

1959年東京生まれ。写真雑誌社、スタジオ写真などを経てフリーの写真家に。1986年のチェルノブイリ原発事故後初めて六ヶ所村を訪れ、核燃問題で揺れる村に衝撃を受け取材を始める。1990年から2002年までは六ヶ所村に在住。2011年から映画製作を開始。一作目『福島 六ヶ所 未来への伝言』は、2014年度キネマ旬報文化映画部門7位にランクインした。第7回平和・共同ジャーナリスト基金賞受賞。現在、核のごみ問題に焦点を当てた二作目を制作中。著書に『いのちと核燃と六ヶ所村』（1989年、八月書館）、写真集『六ヶ所村 核燃基地のある村と人々』（2001年、高文研）がある。

1) 推進側は、当初は「核燃料サイクル」と呼んでいたが、「核」は「核兵器」のイメージにつながる途中から「原子燃料サイクル」と名称変更した。しかし反対側は、当初のまま「核燃料サイクル」といっている。青森県上北郡六ヶ所村に計画された「核燃料サイクル施設」は、「ウラン濃縮工場」「低レベル放射性廃棄物物理設センター」「再処理工場」「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」「MOX燃料工場」などである。

皆さまにお配りしました資料をちょっとご覧ください。年表があります(表1)。1986年のところにチェルノブイリ原子力発電所で事故と書いてあります。六ヶ所村の核燃施設に関しては、その前年の1985年にすでに六ヶ所の村議会と青森の県議会が受け入れを決定してしまっていたんです。受け入れを決定した1年後にチェルノブイリの原発事故が起こったのです。それまでも、映画の最後のほうの古い映像にありましたように、すごい反対運動がありました。あの映像は85年です。六ヶ所村の漁師さんたちを中心にしてあのようにもものすごい反対の声が強かったんです。チェルノブイリ事故の86年以降は、青森県全体に反対運動の火がついてきました。

青森県はご存知のように農業県でもあります。とりわけ津軽といえば日本一のリンゴの産地ですし、お米もおいしいところです。六ヶ所村がある地域は南部地

表1 核燃料サイクル施設関係の主な経緯年表

1984年 7月27日	電気事業連合会が青森県と六ヶ所村に立地を正式に要請
1985年 1月16日	六ヶ所村議会全員協議会が、核燃立地受け入れ決議
4月 9日	青森県議会全員協議会が、核燃立地の受け入れを決定 六ヶ所村泊で「核燃から漁場を守る会」「核燃から子供を守る母親の会」結成
1986年 4月26日	チェルノブイリ原子力発電所事故 この年泊の漁民たちが、事業者の海域調査に対して激しく抵抗する
1987年12月12日	青森県農協青年部、婦人部、農政連、農協労連の4団体が、「核燃料サイクル施設建設阻止農業者実行委員会」を結成、以後、反対運動が盛りあがる
1988年10月14日	ウラン濃縮工場が着工
12月29日	青森県農協農業者代表者大会で、核燃反対を決議する
1989年 4月 9日	六ヶ所村で「反核燃の日」全国集会在開かれ、1万人が集まる
7月23日	参議院選挙で、核燃反対を掲げた農業者の三上隆雄氏が当選
8月	この時点で県内農協の過半数が総会などで核燃反対を決議
12月10日	六ヶ所村長選挙で「核燃凍結」の土田浩氏が初当選
1990年11月30日	低レベル放射性廃棄物物理施設が着工
1991年 2月 3日	青森県知事選挙で、核燃推進の北村正哉氏が、核燃白紙撤回の金沢茂氏、核燃凍結の山崎竜男氏を破って、四選を果たす
9月27日	ウラン濃縮工場へ六フッ化ウランを初搬入
1992年 3月27日	ウラン濃縮工場が本格操業を開始
5月 6日	高レベル放射性廃棄物貯蔵施設が着工
7月 1日	日本原燃サービスと日本原燃産業が合併し、日本原燃が発足
12月 8日	低レベル放射性廃棄物物理施設が操業開始
1993年 4月28日	再処理工場着工
1995年 4月26日	フランスからの返還高レベル放射性廃棄物初搬入
1998年10月 2日	再処理工場貯蔵プールに試験用使用済み燃料を初搬入
2002年11月 1日	再処理工場で化学試験スタート
2004年12月12日	再処理工場で劣化ウランを使ったウラン試験を開始
2006年 3月31日	再処理工場でアクティブ試験を開始
2011年 1月25日	東電東通原発が着工
3月11日	東日本大震災 福島第1原発事故
9月15日	英国からの返還高レベル放射性廃棄物が搬入
2012年 6月下旬	八戸沖マダラから、国の基準値を超える放射性セシウムが検出され、出荷自粛措置

方といわれて、にんにくとか長芋の産地なんです。今日はその生産者の方もお見えになっていて、青森の無農薬ニンニク一袋 500 円で販売させていただいています。原子力関係施設になにか事故があれば、水や空気や大地が汚染され、農産物が真っ先に被害を受けてしまいます。

ということで、チェルノブイリ原発事故以降は、青森県の農業者の人たちが猛烈な反対運動をしたんです。年表をご覧くださいますと、1987 年には農業者の一番大きな組織の農協、JA のいくつかの団体が、「核燃料サイクル施設建設阻止農業者実行委員会」という組織をつくりました。ここが中心になって反対運動を繰り広げます。その過程の中で、ウラン濃縮工場の工事が始まるのですが、88 年の 12 月 29 日には、この農協組織の代表者大会で、核燃の反対決議をするまでにいたりしました。その翌年の 7 月には参議院選挙がありました。青森県というのは、それまではいわゆる保守王国でした。国会議員は全員自民党、核燃を推進してきたのは自民党だったんですね。ところが、反対運動が盛り上がりまして、農業者の方たちが独自に農業者の候補をたてるんです、核燃反対ということをお訴えてですね。その方が段トツトップで参議院議員になるんです。そういうことがありました。農協組織の半数以上が核燃反対を決議するといったこともありました。そういう中で、全県的に反対の声が強くなって、当時の核燃を推進してきた青森県知事でさえ、今県民投票したら核燃反対のほうが多いと認めるぐらいの勢いがあったのです。自民党の議員たちでさえも、地元では核燃反対を言わないと当選が危ないと言われるぐらいで、今まで推進してきた議員たちが、次々と寝返って（という言葉はいいのかわかりませんが）核燃反対と言って立候補したりするようになりました。それほど、本当にこの核燃反対の声が青森県内で高まっていたんです。

私は 86 年以降東京から青森に通うようになりまして、ずっとその過程を見してきました。

次に、年表の 1991 年のところを見てください。2 月 3 日に青森県知事選挙が行われます。県議会も村議会も核燃立地受け入れを決議してはいたのですが、県内の反対運動の勢いがありにも強くなったので、核燃の是非を真っ向から問う選挙になりました。天下分け目の決戦と言われた選挙でした。こういったことがありましたので、私はもっと密着取材をしたいと思ひまして、最初は 1 年ぐらい住んでみようかなと気楽な気持ちで六ヶ所村に移り住んだのです。

私自身も、もしかしたらこの核燃の建設が止まるのではないかと思ひました。それほど反対の声が強かったんですね。しかし、この 91 年の 2 月 3 日の青森県知事選挙で、核燃を推進してきた現職の知事が当選します。そうしますと、雪崩をうつように核燃の建設がどんどんと進んでいきました。また反対運動のほうも、あれほど反対しても結局は大きな力に押し切られてしまうのかといった、あきらめムードといった雰囲気になってきまして、急速にしぼんでいってしまいます。

そのあと、「高レベル廃棄物埋設センター」「再処理工場」の建設も進んでしまい、実際に核物質も運び込まれていきます。

いわゆる核のごみといわれるものの一つ、低レベルの放射性廃棄物は全国原発から日々「低レベル放射性廃棄物センター」へ運び込まれています。

再処理工場に関しては、これまで日本は原発から出る使用済核燃料をフランスとイギリスに船で送って再処理を委託して、そこから出たプルトニウム、それから高レベル放射性廃棄物がまた日本に戻されるということをやってきましたのですが、商業施設として初の再処理工場が今六ヶ所村に建設されています。しかし、トラブル続きで、延期、延期、さらに福島原発事故後、新たな規制基準ができたので、本格操業の目処は立っていません。

また、再処理で生み出される高レベル放射性廃棄物の一時貯蔵施設も六ヶ所村にあります。30年から50年の間冷却しながら、ここで一時的に保管しているわけです。

それらは最終的にはどこか最終処分場に移さなければなりません。しかし、皆さんご存知のとおり、今この日本では高レベル放射性廃棄物の処分の仕方も、処分場所も決まっていないのです。一応今の日本の法律では、この高レベル放射性廃棄物は地下300mより深いところに埋め捨てにするという計画になっていますが、この処分方法自体も問題があるといわれていますし、一体どこにそれをつくるんだという問題もあります。この地震国、火山国の日



映画『福島 六ヶ所 未来への伝言』



「反核燃の日」集会（1990年）



返還高レベル放射性廃棄物の六ヶ所村搬入に抗議する人びと（1995年）

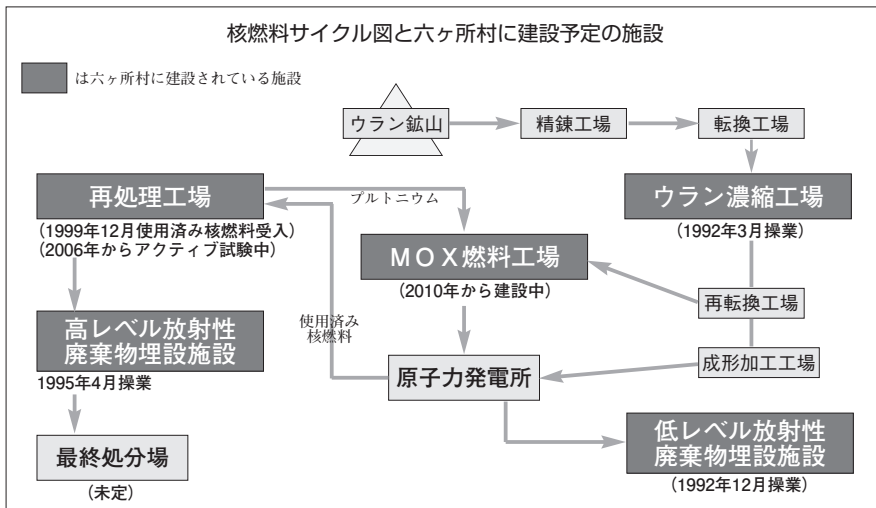


搬入される返還高レベル放射性廃棄物（1995年）

本でそんな地下 300m より深いところに埋め捨てしてしまっただけでほんとうに安全な場所というのがあるのか、どう考えてもあるとは思えません。そういう事態になっています。一時貯蔵施設が六ヶ所所にある、しかしその先の最終処分場所はどこにも決まっていないうのが今の日本なのです。

1 週間ほど前に九州で上映会を開いていただきまして、私は、鹿児島、熊本に行ってきました。ちょっと余談になりますけども、皆さん、鹿児島県の大隅半島もこの高レベルの最終処分場として狙われているということをご存知でしょうか。去年、TBS の番組がすっぱ抜いて全国放映されました。その場所が南大隅町というところ。そこの地元の方々がこの映画の上映会をしてくださいまして、行ってきました。大隅半島には志布志湾開発という大きな開発計画がありました。これは六ヶ所村と同じで、六ヶ所にはむつ小川原開発という大きな石油コンビナート開発の話があったわけですけども、それがとん挫したわけです。今、どちらも石油備蓄基地だけがあるというその歴史的な背景もそっくりで、あまりの類似にびっくりして帰ってきました。下北半島も、九州の最南端の大隅半島も、こういういわゆる地方というか、中央から遠いところが狙われていくという構図が本当によくわかりました。

下北半島には、六ヶ所村の核燃施設だけでなく、たくさんの原子力施設が集中されているんです。東通村には、東北電力と東京電力の東通原発があります。むつ市は、かつて原子力船「むつ」がおかれていたところで、現在は東京電力と日本原電の使用済み核燃料の中間貯蔵施設が建設されています。さらに、本州の最北の大間町には、世界初という全炉心にウランとプルトニウムを装荷するフルモックス型の原発が建設中です。このように、下北半島には、さまざまな原子力施設



設が集中していて、原子力半島とも呼ばれています。

核のごみの問題、とりわけ高レベル放射性廃棄物は、自然界にかえるまで10万年とか100万年という単位の時間が必要というものです。10万年とか100万年なんて想像できませんよね。地球の歴史46億年ぐらいと言われてますけども、現代人の祖先が誕生してまだ数十万年とかです。1万年後と言われてたって、どうなっているか私たちには想像できない。平安時代だってたかだか千数百年前なんです。そのぐらいの時間スパンまでしか人間の想像力が働かないのに、10万年とか100万年もの間、この放射能の毒性が消えないというものをつくり出してしまっているということは、本当にいいのだろうか。人類として考えなきゃいけない問題ではないかと思っています。

私たちが原発の電気を利用するようになって、たかだか半世紀です。この半世紀の間に、原発をつくり、そして膨大な放射性廃棄物を生み出してしまって、しかも私たちが生きているこの時代にはどうしようも解決ができない。どんなに優秀で有能な科学者であっても技術者であっても政治家であっても、いまだ人間の知恵では減らすこともなくすこともできない、とんでもない核のごみ、負の遺産を膨大に生み出してしまっているわけです。これを私たちは何世代にもわたって残していかなければならないのです。私はやはりこの時代に生きてしまった大人の一人として、未来世代への大きな責任を感じています。

そんなこともありまして、このようなテーマの映画をつくりました。もともとは、私は六ヶ所村に長く関わってきましたので、六ヶ所の映画をつくるということで最初はスタートしたんです。先ほども歴史的なことをすこし申しましたが、やはりあれだけの、賛成する人にしても反対する人にしても、どんな立場のものすごい葛藤と苦悩があったわけなんです。私自身は、もちろん人類が原子力を利用するということに対して大きな疑問をもっておりますし、原発に反対ですが、六ヶ所村に長く暮らしてきて、原子力にただ賛成反対という単純な構図ではないことをみてきました。賛成する人もただ知識がないとか考えが足りないとか、お金がほしくて賛成したというわけではありません。ものすごい安全神話が垂れ流され、



建設中の再処理工場（2000年）

その上に乗せられた形ではありますけれども、やっぱり、こういうものがきたら村が豊かになるのではないか、子どもたちの仕事が増えるのではないか、村や子どもたちのためになるんじゃないかと思って賛成した人もたくさんいるんです。

村の中というのは人間関係がほんとうに濃いわけなんですけれども、そういう人間関係が、反対・賛成ということで引き裂かれ対立させられて、一時は冠婚葬祭以外は親戚や親兄弟でさえ口もきかないとか、道で会っても挨拶しないとかそういうときがありました。そういうときは、やはり子どもたちの心も荒んでしまいますので、中学校でのいろいろな事件も多くありました。そんなこともありまして、この核燃も原発も含めていろんな原子力施設というものが、賛成にしる反対にしる、人々の苦悩の上につくられてきたものなのだということをぜひ訴えたい、伝えたいという思いがずっとありました。あれだけの過酷な体験をさせられてきた六ヶ所村の人たち、あるいは青森県の人たちの体験を、このまま埋もれさせてしまうのは悔しい。何ごともなかったかのように核燃料サイクル基地が動いていて、今見れば建物があればだけ建ってしまっているの、元からあるように感じてしまうかもしれませんけれども、そうした人々の苦しみの上に、そういう施設が建設されてきたんだということを伝えたい。あの時代を体験した一人としてそのように思ったのが、映画をつくるきっかけとなりました。

クランクインしたのは2011年の2月でした。その1か月後に3.11が起きました。大地震、大津波、そして明らかに人災である福島原発事故が起きました。私自身も呆然としまして、映画なんかをつくってる場合じゃないんじゃないかとも思いましたし、もっと現実的に福島の人たちの支援になることをしなければいけないんじゃないかなとも思ったのですが、自分にできることはなんだろうと考えたときに、この映画を完成させてたくさんの方々に見ていただくことが、私ができる福島への支援であり、青森、福島も含めた東北への応援になるんじゃないかなと思ひまして、映画の撮影を再開いたしました。

原子力発電所は核の入口です。そしてたとえ事故がなかったとしても、出口からは大量の放射性廃棄物が必ず出てきます。それが今までほとんど語られてきませんでした。まるでそんなものはないかのように原発が推進されてきたのです。

余談ですが、核のごみ問題を引っ張り出してくれたのが小泉元首相でした。横須賀でもこの映画の上映会をしていただきましたが、小泉さんは横須賀にお住まいです。横須賀上映会のときには、小泉さんにもぜひお越しくださいという丁寧なお手紙を添えましてご招待券をお送りさせていただいたんですが、残念ながら当日はお姿は見えませんでした。

福島原発事故のあと六ヶ所村では不安の声や反対の声が強まっているのかなという、ある種の期待のようなものをもっていたのですけれども、必ずしもそう単純ではありませんでした。これだけの核燃施設を抱えている地域ですので、もし自分のところで何かあったらとんでもないことになるという、その不安の気持ち

はもちろんあって、それを今まで見ないようにしてきたわけです。しかしそのふたを開けられてしまったという感じで、村の人たちの核燃施設に対する不安の声はもちろん高まってはいました。でも同時に、このことで日本の原子力政策あるいは核燃料サイクル政策が変わってしまって、原発や核燃が止まってしまったら、自分たちの仕事がなくなってしまう、明日からの生活はどうしたらいいんだろうという、そっちの不安の声のほうがもっと高かったんです。それほどまでに六ヶ所村は、いわゆる核燃城下町というか、核燃マネーにどっぷりと浸かってしまっているわけなんです。

しかし、本当に今は、映画の中で東海村の前村長の村上さんもおっしゃってましたように、私たちは転換期に立たされていると思います。福島原発事故は、本当にこのままの路線でいって原発を再稼働させて、さらに核のごみを増やしていっていいのか、それともここで立ち止まって違う道を選択すべきなのかということを、考えるチャンスを私たちに与えてくれたのだと思っています。

そういう意味で、今この時代に生きている私たちの責任が未来の世代に対して大きな鍵を握っていると私は思うのです。そんな意味を込めてこの映画をつくりました。どうもありがとうございました。

[しまだ けい]